
Rase of Arietta

異 蒼太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R a s e o f A r i e t t a

【Nコード】

N 3 2 5 9 D

【作者名】

巽 蒼太

【あらすじ】

萩本慎太郎の一般的普遍的日常的な生活はある日突然終わりを告げる。学校から帰ってくれば家の門には『本日より差し押さえ』の紙。いきなり現われた男に渡されたのは父親が作った金融契約書。当の本人は行方知れず。与えられた猶予は二カ月間。世の中の理不尽さと父親の不甲斐なさに目頭を押さえつつも、慎太郎はとりあえずその借金を返済することを決意する。が、提示された金額はあまりにも膨大だった。幼馴染み、お嬢様、大金持ちの知立悠梨を頼って何とか現状打開を試みるが……。

第1話

『本日より差し押さえ』

「……………」

学校から帰ってきて、家の門扉にそんなことが書かれた紙が貼ってあったら、どういう反応をするのが自然なのだろうか。

とりあえず笑っとくか？

それとも絶句するか？

皆目見当も付かないので、萩本慎太郎はひとまず沈黙した。そしてその沈黙はいまも続いている。

「……………」

どすん。肩にかけていたスポーツバッグがずり落ちた。そのことに慎太郎は気付かない。気付いたかもしれないが、気にする余裕がないのだ。

思わず慎太郎は今日一日の出来事を振り返った。

朝起きて、朝食を食べて、家を出て、遅刻確定二分前に教室に入って、いつもどおりボケーツと授業を受けて、放課後になって部活に行こうと思ったら今日はグラウンド整備のため中止だったことを思い出して、徒歩十五分の道程を乗り越えて帰宅してみればはいこれですよ。

『本日より差し押さえ』

冗談にしてはえらく笑えない。笑えなくてもいいから冗談だと言ってくれ。慎太郎はぼんやりとそう思ったが、どうやら冗談ではない線が濃厚だ。

車庫を見る。車がない。自転車がない。昔遊んでいたキックボードもホッピングも、園芸用のシャベルまでない。

庭を見る。鉢植えがない。プランターがない。植えてあった松の木までもがご丁寧につっこ抜かれ、いまは平坦な地面をさらしている。

では家の中は？

呆然としながらそんなことを思い付き、門を押し開けようとしたとき、

「すみません」

背後から飛んできた声に足が止まった。

「ああん？」

つい喧嘩腰で振り向くと、そこにいたのは愛想笑いを浮かべたスーツ姿の男。その笑顔が卓越した営業スマイルだと直感し、妙な不快感を覚えていると、男のほうで口を開いた。

「恐れ入りますが、萩本さまのご家族の方でしょうか？」

随分と腰の低い物言いである。下手な態度を取ることに慣れているような感じがした。

「そうだけど……あんたは？」

訝りながら言うと、男は懷から名刺入れをだし、その中の一枚を慎太郎に差し出した。

「申し遅れました。私はこういう者でございます」

手慣れた動作に対し、慎太郎は恭しく名刺を受け取る。

金融会社ジュエリー。下請け業務担当。長谷川昌紀。

紙片をザッと見通すとそう書いてあった。

ん？

金融会社？

「……………」

慎太郎の背中を滝のような冷や汗が流れまくる。頭の中で“利息”とか“夜逃げ”とか“借金のかた”とかいう言葉が浮かんでは消えていく。

名刺を持ったまま固まる慎太郎に、長谷川とかいうらしい男が饒舌に話し出した。

「この度は私どもの会社、ジュエリーをご利用いただき誠にありがとうございます」

そんなわけわからん会社を利用した覚えはない。思いながらも慎

太郎は長谷川の話を聞く。脳裏には最悪の結末がこびりついて離れない。

「本日をもちましてご返済期日となりましたので、契約書に明記していただいたとおり、萩本祐作さまの名義となっている家具、備品、自動車両、建築物のいっさいを回収させていただきました」

萩本祐作。慎太郎の父親の名前が出され、彼の当惑レベルは二倍速となって駆け抜けていく。踊り狂う心臓を止めることができない。意に介さず長谷川は喋り続ける。

「ですが、遺憾ながらそれでもご返済金額には達しておりません。そこで萩本さまに伺ったところ、残りの借入金金は萩本さまのご家族の方からお支払いいただけると申されましたので、本日はご挨拶に赴いた所存でございます」

あくまでにこやかに、でもどこか強い圧力を伴って長谷川は言う。慎太郎はと言えば、茫然自失の三段階くらい強力な感情に襲われて勢い良くパニック中。開いた口が塞がらないとはこのことだ。

「貸借主変更とのことなので、次の支払い期日は二カ月後となっております。それまでは利子は発生いたしませんのでご安心ください」
ちつとも安心できない。借金？ 取り立て？ どういうことだ？
俺は十分前までいつもどおりの平凡生活にいたはずだぞ。それともこれはやっぱり何かの冗談か？ ドッキリか？ そうじゃないとしたらいったい何だと言うんだ？

慎太郎はまず自分の耳を疑い頭を疑い、次に長谷川の頭を疑い存在を疑い、事実を疑い現実を疑っていると、

「それではこちらをお受け取りください」

長谷川がまた懷から、名刺入れが入っていたほうとは逆の内ポケットから、二枚の封筒を取り出して慎太郎に渡した。

「……これは……？」

「一枚は残りの返済額と諸々の書類。もう一枚は萩本祐作さまからのものです」

「親父の……？」

しげしげと二つの茶封筒を観察し、乱雑した脳内の情報を整理する前に、長谷川が会釈をして別れを告げた。

「それでは私は失礼させてもらいます。期日は今日から二カ月後です。すのでお忘れなきようお願いします」

「……あ、いや、おい、ちょっと待て」

「なにか？」

「なにかじゃねえよなにかじゃ。なんだこれは、どういうことだ、どうなってる？ 借金だと？ ふざけるな」

切羽詰まった表情をして早口に長谷川に迫る。だが相手のほうは動じず憶せず、慎太郎の神経を逆撫するような余裕の微笑を見せて、

「と、申されましても、私どもは萩本祐作さまと正式な契約を交わしたうえで事にあたっております。返済を拒否されるのであれば萩本祐作さま自身が代理貸借人の契約を破棄してもらわねばなりません」

「なんだと？ なら親父はどこだ、どこにいる。仕事じゃねえのか」「存じ上げません。それでは失礼いたします」

用は済んだとばかりにくるりと踵を返して、一度も振り返ることなく歩いていく。路肩に停めてあった黒塗りの乗用車に乗り込むと、一つ目の十字路を曲がってあっさりと視界から消えてしまった。残されたのは紙切れ二つを持って佇立する慎太郎のみ。

「……………」

微動だにせずその場に立ち尽くす慎太郎。いまだに現実味が沸かない。どうすればいいのか、何をすればいいのかもわからない。今は手元にあるこの封筒に賭けるしかない。何を賭けるのかは慎太郎本人にだってわかりはしない。

「……手紙か？」

長谷川から受け取った父からの贈り物。中身は手紙だった。ここで実は嘘でしたと言われれば安堵の余り道路にぶっ倒れるだろうが、書いてあったのは、

『すまん。たくましく生きてくれ』

「ふざけんなああ！」

慎太郎は父親からのメッセージを握り潰し破り捨て放り投げた。犬の散歩をしていたおばさんが奇異的な目で見てくるがかまうものか。

はあはあと呼吸を荒げて肩が大きく上下する。そしてまた沈黙。くだらなすぎて怒りすら沸いてこない。いつそのこと笑いながら近所を走り回りたい気分だ。

「……残りの返済額だと？　ざけなくそ」

悪態を吐きながら、先程発狂した際に落としてしまったもう一枚の封筒を拾い上げる。

家一件を差し押さえたんだ。もうそんなに残っているわけじゃないだろう。慎太郎は自らにそう言い聞かせる。いったいいくらだ。百万か？　二百万か？　高校生の慎太郎からしてみれば天文学的な数字を予想し、覚悟を決めてから封を切る。

「……………あん？」

思わず全思考が停止した。なにやらゼロがやたらと多い。目をこすってみるが、幻覚ではなさそうだ。

慎太郎は視神経にすべての気力を集結させて、¥マークの横の数字を凝視する。一、十、百、千、万、十万、百万、千万、一億。

？

「……いや待て。まさかな。見間違いだろう」

慎太郎は金額の読み取りに再挑戦した。一、十、百、千、万、十万、百万、千万、一億。

??

「……………いやいやいや……………」

目の錯覚だと信じ、慎太郎は希望を捨てない。三度目の正直だ。

「一。十。百。千。万。十万。百万。千万。いちお……………！！！！？」

慎太郎の瞳孔が限界まで開かれた。ペラ紙をもつ両手がプルプル

と震える。不意に視界が反転。無重力下。
慎太郎は驚愕の余り道路にぶっ倒れた。

第2話

萩本慎太郎は夢を見ていた。

六年前、まだ母親が生きていて、家族全員、五人で行った最後の遊園地。

当時十歳だった慎太郎は、浅はかだった。その遊園地で一番の名物、大人でも泣くことがあるという恐怖のアトラクション“ファントムホテル”に挑み、スタートしてから五分。一階の階段を上がる前に泣きながらコースを逆走していった。一緒にいた一コ下の妹、みなみにいたっては大号泣してその場に頭を抱えてしゃがみ込んでしまった。それに気付いた慎太郎が再び逆走して、しまいにはみなみと共に従業員専用の出口から脱出するという、今思えば他愛ない笑い話だ。

まさか六年後に、こんな間の抜けた事態に見舞われるなんて、今も昔も考えることはなかったが。

そして今回は、まったくもって笑えない話なのである。

何だったわけ？ そう、借金だ。確か額は一、十、百、千、万、十万、百万、千万、一億……。

ははははは。もう笑うしかねえ。やっぱり笑い話か。

「兄さん、変な顔しながら往来のど真ん中で寝ないでください。恥ずかしいです」

その声で慎太郎は覚醒した。

「……………みなみ」

「おはようございます」

アスファルトの上で大の字になっている慎太郎の頭の上、妹の萩本みなみがこちらの顔を覗き込むようにして立っていた。

慎太郎と同じ城星高校のセーラー服、半縁眼鏡の奥に見える切れ長の目、肩のあたりで揃えた長めのショートカット。間違いなく今のみなみだ。髪が長くて眼鏡もかけていなかった六年前のみなみで

はない。

「こんなところで行き倒れごつこですか？ みつともないから早く起きてください」

容赦のない率直な意見。やはりみなみか。

昔は明るくてよく笑う子だったが、母親が死んでからは家事全般をやるようになり、その経験からか達観して大人びた性格になった。ストレートな言動と鋭い目付きから、初対面の相手には冷たい人間だと思われがち。だが実際は、他人の気持ちがわかる優しい妹だ。そこは六年前も現在も変わらない。

「……みなみ」

「何ですか」

「パンツ見えるぞ」

みなみはムツとしながら大きく一步後退。

「くだらない冗談を言えるくらいだから、体は正常なようですね。どうしてこんなところで惰眠していたのですか」

「どうしてって、なんか借金がどうのこうのって……」

記憶が一気にフラッシュバック。慎太郎はガバツと起き上がった。

「そうだみなみ一大事だ！ 借金は借金で借金が……！」

「このことですか？」

慎太郎の眼前にみなみが一枚の紙を見せ付けた。

「兄さんの横に転がっていました。何です？ この理解に苦しむ金額は」

「いや、その、あれ？ っていうかお前、いつ帰ってきたんだ？」

「二分くらい前です」

「……今何時？」

「五時十一分です」

みなみが左手の腕時計を見て答えた。慎太郎は自分も腕時計をつけていることを思い出して盤面を見た。

P M 0 5 : 1 1。

家に着いたのが五時過ぎで、あのアホ男との会話がせいぜい七、

八分だろうから、逆算してみると慎太郎の気絶時間はそれほどない。みなみと長谷川は入れ違ったのはほとんどタッチの差だったわけだ。

「それで、何があっただんですか。ひどい顔していましたが」

「そんなに変わったのか？　どんな？」

「ひどい顔です。名前を付けるならきつと泣き笑いです。すごく不気味でした」

「ああ、そう」

慎太郎の中に再度現実味のない緊迫感が染み渡ってきた。そうだ。思い出してきたぞ。長谷川なんたらとか抜かすヤローから出来損ないのギャグ漫画みたいなこと聞かされて、親父の……訂正。クソボケ親父からの手紙に激怒して、そして……、

「なあみなみ。これは夢か？」

「わたしの主観からすればまぎれもなく現実ですが、兄さんが寝ぼけて夢見心地なのかどうかまではわかりません」

「夢がいいな、すごく。うん、夢がいい。むしろ夢にしてくれ」

低音でボソボソ喋る慎太郎に、みなみが手を伸ばして頬をつねってきた。

「痛いですか？」

「……むっちゃ痛い」

「なら、これは現実です」

頭一つ分下の目線にいるみなみを見て、慎太郎は深い深い溜め息を吐いた。同時にみなみが指を放す。

「……なあ、みなみ」

「はい」

「万の次の桁って億であってたっけ」

「はい？」

眉をひそめるみなみに、慎太郎は三点リーダーをまじえながらつらつらと先の出来事を伝えた。

すべてを話し終え、慎太郎がまたもや吐き出した深い溜め息で締

めくくつた。みなみはと言えば、少し目を見開いて小さな唇をポカ
ンと開けているだけだ。慎太郎は知っている。これでもかなり驚い
ているのだ。

「……本当ですか？ それは。おいそれと信じるのはバカバカしい
です」

「俺がこんなウケも望めないくだらないジョークを言うと思うか？」
「思いません。わたしが言ってるのは、その長谷川さんのことです。
本当にお父さんがその会社と契約したのですか？」

「わかん。でもかなりマジっぽかったけどな。それに見てのとお
り、車庫も庭もがらんどうだ。たぶん家ん中もだろっ」

「がらんどう？」

みなみは目を細めて言い返した。そして我が家の現状を見て、あ
と短い感想を漏らした。まるで今になって初めてこの惨状を思い知
った風だ。

「なんだよ、気付いてなかったのか？」

「それどころじゃなかったですから」

「なんだそりゃ？」

「なんでもありません。それより、うちの中も押収済みというのは
確かなんですか？」

「さあな。目で見て確認したわけじゃねえが、望み薄だな。とにか
く、入ってみるか」

みなみが同意すると、慎太郎は傍らで放置されていたスポーツバ
ッグを拾い、見てみればみなみが萩本家の堀づたいの曲がり角に落
ちていた学生鞆に向かっていているところだった。

「……なんであんな場所に置いといたんだ？」

疑問に思った慎太郎が訊いてみると、

「だから、なんでもありません」

何がだからなのかイマイチわからなかったが、慎太郎は気にしな
いことにした。今は、それどころではないのである。

玄関の鍵穴に合鍵を差し込み、回すと普通に開いた。もしかした

ら開かないのではないのかという意味不明な懸念は杞憂に終わり、家屋に入ると、まず下駄箱と傘立てがなかった。もちろん靴などは一足もない。

さらに前進。手近なりビングのドアを開けてみると、悲しいものだった。新築当時の状態となっている。絨毯にカーテンまで消失していた。

キッチン、トイレ、風呂場、父親の部屋と、一階は全部見て回ったが、現状の再確認をただけだった。

眉間にしわを寄せながら廊下を歩いていると、階段を下りてきたみなみと出くわした。

「どうだった、上のほうは」

みなみはゆつくりと首を振ると、古ぼけた財布を見せ、

「これだけ」

「なんだそれ」

「クローゼットの裏に隠しておいたわたしのへそくりです」

慎太郎は感心した。さすが、しつかり者のみなみは自分とは違う。へそくりなんてしていたとは。

「ちなみにいくら？」

「二万五千円です。少なくてごめんなさい」

「ごめんなさいと言われても。慎太郎はへそくりはおろか全財産をかき集めても一万円にすら届かない。むしろそれだけでも生き残らせたみなみを褒めたたえたいくらいだ。冷静に考えれば、今は夜食べる物もどうなるかというぐらいなのだから。」

「なあ、これってどうなんだ？ 俺達今普通にこの家に上がり込んでるけど、ここで寝泊まりしても怒られないのか？」

「それは賢明とはいい難いです」

みなみは階段の段差に姿勢よく座った。

「今の状況がタチの悪い冗談でない限り、この家はその金融会社の所有物となっているはずです。そこへわたし達は無断でお邪魔しています。簡単に言えば、不法侵入に該当すると思います。警察沙汰

にされたら言い訳の余地はありません。こちらが完全に悪者です」

「……ううむ」

慎太郎はみなみの斜め前で壁にもたれて腕を組んだ。

ぶつちやけみなみの言い分は七割くらいしかわからないが、なんか無理っぽいことは理解した。理解したうえで、また黙考する。

結局のところ、俺にどうしろと言うんだ？

慎太郎はポケットからあの紙を手を取った。領収書のようなみかけだが、内容には天と地ほどの差がある。

二億三千三百五十万円。

2,3350,0000円。

におくさんぜんさんびやくごじゅうまんえん。

みなみのへそくりを何倍にすればいいんだ？ 二億三千三百五十万わる二万五千だから……えー、二わる二が一で……三わる二が……

……ええいうつとうしい。やめだやめ。

「みなみ、なんか名案でも思い浮かばないか？」

「浮かびません」

「……………」

ううむ。慎太郎はまた黙考に励んだ。そして一人の少女が念頭に浮上した。

幼稚園からの腐れ縁。世間で言うところの幼馴染みってやつか？

大金持ちでお嬢様、同級生の知立悠梨。

まさか代わりに借金返済してくれとは言わないが、相談相手にはなりそうだ。こちら五桁以上の金を動かした体験などはない。それに寝床も募集中だ。あのだっ広い屋敷なら十人や二十人増えたって問題はないだろう。最低でもみなみだけでも宿泊できるように説得せねばならない。

「みなみ、悠梨のどこに行ってみないか？」

「悠梨さんの家にですか？」

みなみは悠梨のことを悠梨さんと呼ぶ。彼女は慎太郎と幼馴染みだが、みなみとも幼馴染みなのだ。三人で遊んだことだってあるし、

この提案に気後れはない。

「仮に行つたとして、何と言つつもりなんです？ 借金しちゃったぜー今夜泊めてくれー、なんて言つたら、あの人でなくても門前払いですよ」

「ま、そんなときやそんなときだ」

「そんなときやそんなときで……無茶苦茶です」

不安そうになおかつ呆れた表情をするみなみに慎太郎は苦笑した。
「今現在ですでに無茶苦茶なんだから、こつから先にちよつとやそつと無茶したつてちよつといいくらいだろ」

「その理屈も無茶苦茶です」

「うんまあ、気にするな、としか言いようがない」

「兄さん、何だか随分と楽天的ですね。二億ですよ？ わかつてますか？ 一万円札が二万枚もあるんですよ？ すつごく馬鹿げてます。未知の領域です」

「まあ……それなんだよな。今となつて思えば、二億とか言われても親近感なさすぎてパツとこないんだよな。まだ百万円程度のほうがしつくりくる」

「大丈夫なんですか？ そんなので」

みなみが心配そうに見上げてくるが、実は大変大丈夫ではない。二億がどれほどのものなのかくらいはわかつている。だからこそ弱音が吐けない。みなみを不安がらせるわけにはいかない。頭が悪いんだから空元氣ぐらい全開にしとかねばなるまい。

「とにかく、行つてみようぜ。善は急げだ。つつかじきに夜だ。暗くなる前に行こう」

慎太郎は玄関に向かって歩き出し、その後ろをみなみが不得要領な顔付きでついていった。

第3話

知立悠梨。

父親は貿易会社の社長、母親は世界的に有名なファッションデザイナー。大富豪とまではいかないが、富豪レベルなら軽く陵駕する知立財閥の一人娘。

慎太郎とはなんの因果か知らないが小中高と十一年間同じクラスだ。

なぜそんなけつたいな人物と幼馴染みなどやっているのかというと、慎太郎と悠梨の母親が旧友で親友だという妙な奇縁があるのだ。悠梨の母には慎太郎の母が他界したときよく世話を焼いてもらった。落ち込んでいると優しく話しかけてくれていたのに、当時の慎太郎はそれをつっぱねて悲劇のヒーローを気取っているという、今の慎太郎が見たら二、三発ぶん殴ってやりたくなるような甘ったれなクソガキだった。

悲しいのは自分だけではないということすらわからないかったのだから。

そういえばあの頃は悠梨も学校でやたらと話しかけてきて、うつとうしいなとか思っていたが、あれも気を遣わせていたんだろうな。そして今もまた迷惑因子を持ち込もうとしている。六年前となにも変わってないな、俺は。

情けない気持ちで満たされながら、慎太郎は荘厳な作りの格子門の横にあるインターフォンを押した。

そして十秒ほど経過。

「……留守かな」

「家の明かりは点いてますが」とみなみ。

慎太郎がもう一度ボタンを押そうとした一瞬前、ノイズ音の後にスピーカーから声が聞こえてきた。

「はい、知立でございます。すみません、立て込んでいたためお待

たせしてしまいました。申し訳ありません』

悠梨ではない。悠梨の両親のどちらかでもない。使用人の人だった。

「ああ、いえいえどうぞお構いなく」

スピーカーの前でお辞儀をする慎太郎。待ったと言っても三十秒くらいだし、すでに夜の帳が降りている。しかもこっちは果てしなく妙ちきりんな用事で訪ねにきたのだ。すみませんと言われてもこっちがすみませんと言いたくなる。

『恐れ入ります。それで、どのようなご用向きなのでしょうか』
威厳のあるテノールの利いた男声。確か執事の宮城さん、だったろうか。

「えっと、俺です、萩本慎太郎。んで、悠梨は……あー、悠梨さんはいらっしゃいますでしょうか？」

『お嬢様ですか。ご在宅でございます。少々お待ちくださいませ』
インターフォンが保留状態となり、慎太郎は肩で大きな嘆息をした。あの人と会話するとなにゆえあんなに疲労するのだろうか。

「兄さん、本当に悠梨さんに件の話をするのですか？」

みなみの問いかけに慎太郎は回れ右をして彼女と顔をあわせる。

「まあ、あまり乗り気ではないかな。あいつのことだから、ぶつくさ文句ばっか言っても最終的には、やっぱり協力してくれんだろうなあ……」

「わたしもそう思います。それで、兄さんは悠梨さんのそんなお人好しっぷりを利用するみたいで、ちょっと自己嫌悪になっているのでしょう」

「そうなんだよなあ……つっても他にアテもないしなあ」

慎太郎は自分の交遊関係の幅の狭さを呪いながら佇んでると、
『お待たせいたしました』

という機械的な補正を受けた声にまた振り返った。

「ああ、はいはい」

『中に入れるとのことでございます』

宮城が発言すると同時に、両開きの巨大な門扉が自動で開かれた。『どうぞお入りください。すぐに案内の者に迎車を向かわせますので』

「いやいやいや、いいつすよそんなもん。勝手に歩きますんで」
恐縮しまくって安い頭をペコペコ下げる慎太郎。傍からすれば訪問販売に来た営業外回りにしか見えない。

客人にご足労をかけるわけにはいかないと、妥協しない宮城にみなみが話をつけ、今は揃って馬鹿でかい庭園を歩行していた。

右を見れば澄み切った水が波打つ噴水があるし、左を見れば龍だかなんだかの形に刈り込まれた繁茂があるし、前を見れば腰を抜かすほど豪華な四階建ての建物がある。もはや邸宅どころかお屋敷だ。長い石畳を渡り終えると、玄関の前に誰か立っていた。カチューシャ、エプロンドレス、フレアスカート。どっからどう見ても純度百パーセントのメイドさんだった。しかもあの人は確かメイド長の人だ。名前は……吉田だったっけか？

「こんばんわ。お待ちしております」

体の前で両手を合わせ、完璧な角度で頭を下げ、

「慎太郎さん、みなみさん。どうも、ご無沙汰しております」

「ああ、ども。久しぶりです、吉田さん」

直後、みなみが慎太郎の袖を引っ張った。耳元に口を近付け、

「兄さん、吉田じゃなくて吉川です。吉川茜さんです。吉田はハズレです」

小声でそう教えてくれた。見事に固まる慎太郎。

「……あ……っと……すんません。マジすんません」

平謝りするしかない慎太郎に茜はやりわりと微笑む。

「ふふ。いいですよ、謝らなくても。気になどしていませんわ」

「ああ、すんません」

典型的なことをする慎太郎に茜はまた笑いかけた。こうして見ると慎太郎やみなみと同世代にしか思えないが、確か二十代の半ばくらいだったはずだ。もはや慎太郎の記憶力なんてアテにならないが。

「さあ、どうぞ中にお入りください」

茜は流れるような所作で扉を開け、ドアノブを持ったまま萩本兄妹に出入するように促す。そして知立宅の玄関に足を踏み入れると、よく見知った人物が出迎えてくれた。

「おいーっす。こんな時間になんの用だ？」

そこにいたのは、片手を腰に当てて赤絨毯の上に立つ小柄な少女。二度寝して今起きたばかりかみたいなセミロングの髪。幸い髪質が良いののでウェーブをかけているようにも見えるのでそれはまだいいが、服装はタンクトップにホットパンツというラフ過ぎる服装。靴下すらはかずに裸足だ。

一見すれば世間一般で認識されているお嬢様とは程遠いが、間違はなくこの知立家の一人娘、幼馴染みの知立悠梨その人である。

そして慎太郎が何か口にした矢先。

「お嬢様！」

と声高に叫んだのはメイド長の吉川茜。「げ、茜。くそ、来るんじゃないかった」

茜は慎太郎達の前を会釈してから通過して毒づく悠梨に接近した。「そのようなみつともない格好はお止してください！ 前々からそう言っているではないですか！」

さっきまでとは打って変わって、微笑ましい表情など彼方に捨て去り柳眉を逆立てている。それに対し悠梨は能天気な顔で、

「んあー？ だって暑いしさー、こっちのほうが動きやすいじゃん」

「そういう問題ではありません！ それになんです？ その言葉遣いは？ もっと旦那様と奥様の娘であることを自覚して、品行方正な言動を心がけてくださいまし！」

「あーもー、うるさいなあお前いつも」

「うるさいとは何事ですかうるさいとは！ わたくしには教育係としてお嬢様をどこに出しても恥ずかしくない淑女にする責務があるのです！ それを言うに事欠いてうるさいなどは……ゲホッ、ゲホッ……！」 むせながら顔を真っ赤にする茜の背中を、悠梨がポン

ポンと叩く。

「ほら、慣れないのに怒鳴ったりするから」

「……ゲホッ……すみま、せん……。いえ、そうではありませんせん。いったい誰のために怒鳴ってると思ってるんですか!」

「あーわかったわかった。茜の言うしゅくじょとやらにはそのうちなつてやるから、あんまり怒るな」

「……本当ですか? 今まで幾度となくそのセリフを耳にしてきましたけど。お嬢様の言うそのうちとは何日後のことなのですか?」

「まあ、目分量」

「意味不明にも程がありますわ」

茜は諦観したように重く息を吐いた。

「わかりました。今日はここまでにします」

靴を脱いで広間の隅でとくに見物人を決め込んでいた慎太郎とみなみに向けて茜は、

「慎太郎さん、みなみさん。わたくしはこのへんで失礼させていただきます。後程お嬢様のお部屋にお飲み物をお持ちいたしますので、またそのときに」

たおやかに頭を垂れると、髪とスカートを揺らして翻り、厨房に続く廊下へと歩き去っていった。

茜の背筋をピンと張った後ろ姿を見送りながら、慎太郎はようやく悠梨に話しかけた。

「相変わらず忙しないな、あの人は」

悠梨は慎太郎を見上げて、ポリポリと頭を掻きながら言う。

「茜のことか? 忙しないというかやかましいだけだろう。あいつは堅物で頭でつかちだからな。あたしは好きなんだけど、どうにも口うるさいのがたまに傷だ」

「少しは言うこと聞いてやれよ。毎日あんな叫んでたら可哀相だろ」

「可哀相って言うてもなあ。うんじゃ聞かお前、ピッカピカのドレスを着てお嬢様言葉を喋りながら口に手を当てて“オホホホホ”なんて笑ってるあたしを見てどう思う?」

「……………すまん、勘弁してくれ」

「だろ？ そんなならあたしよりもみなみの絵になる」
たしを引き合いに出さないでください」

みなみが口を挟んできた。二人並ぶと年上の悠梨のほづがちっこいのである。

「そんな格好わたしだつて似合いません」

「そーか？ 結構いい感じになると思うんだけどな」
「なりません」

みなみは言い切つてから眼鏡のブリッジを押さえた。

「それより兄さん。悠梨さんに伝えることがあつたのではないのですか、色々」

「まあ、そうだな」

当然部外者の悠梨は小首を傾げているが、

「なあ悠梨。実はな」

と言う慎太郎を遮つて、

「あー、ちよつと待った」

一拍置いてから、

「なんかよくわからんけど、ややこしい話なんだろ？ 立ち話なんてあたしがしたくないし、とりあえずあたしの部屋に行こう。茜がお茶持ってきてくれるし」

そう言う二人の返事を待たずに、先頭を切つて階段を上がっていく。悠梨の自室は三階。

慎太郎とみなみは拒否する理由もないので、先行する悠梨を追つて階段を上り始めた。

第4話

「二億う？　なんだそれ、アメリカンジョークか？　笑ったほうがいいのか？」

「実を言っと、俺も笑いたい」

「ううむ……」

悠梨はいかにも難しそうな顔をして唸った。腕を組み、唇を尖らせ、右斜め上を見ながら黙考している。

なんとも広大な悠梨の部屋。学校の教室四個分はある。ベッドの上であぐらを掻いているのが悠梨、同じベッドに浅く腰掛けているのがみなみ、近くの壁にもたれて片あぐらを掻いているのが慎太郎。悠梨の部屋は彼女の性格上、散らかっていると容易に想定できるが、意外や意外、塵ひとつ落ちてない程に綺麗だ。ただ使用人の人が毎日掃除してくれてるからなだけなのだが。

「二億って言われてもなあ。さすがに二億くれて無心されて、はいどうぞと融資できるほどあたしに貯金はないぞ」

「だろうな。まあ、それで、折り入って頼みがある、二つほど」

「借金肩代わりしてくれてのならお断りだけだな」

「そこまで虫のいいこと言うか。とりあえず、頼みその一は、しばらく俺達をお前んちに泊めてくれ」

「一泊いくらでだ？」

「タダで頼む」

「本気か？　タダより高いもんはないのに」

「すこぶる本気だ」

「ほお……」

「……肩揉みとマッサージでどうだ」

「……」

「宿題代わりにやってやるから」

「……」

「わかった、学校じゃお前のパシリになってやる、これでどうだ」
「あと鞆持ちも」

「まあ、いいだろう」

「掃除当番も代わってくれ」

「わかったわかった」

「あたしが先生を怒らせたらお前が代理で説教されるように」

「……」

「あれ、返事は？」

「……はいはい」

「それと今日からあたしのことは悠梨さまと呼ぶように」

「あーうるっせえな好きにしろ！」

掴み掛からん勢いで慎太郎が吠える。悠梨は“やった”と嬉しそうにガッツポーズ。みなみは複雑そうな表情で傍聴役。

「まあ冗談はこれくらいにして」

と前置きする悠梨。恐らく半分以上は本気なのだろうが。

「マジでどうするんだ、二億ウン千万も。二か月間死ぬ気で働いたって到底稼げないぞ」

「知るか。なんとかするんだよ」

「どうするんだ」

「まあ……理想論でいくなら、悠梨の親父さんに二億三千三百五十万円借りて、その金で返済したら、あとは萩本家総出で一生かけて親父さんに返していく……かな」

「頭の悪い手段だな。実際にそんなことやって、一日に一万ずつ返してったとしても、何日かかると思ってたんだ？」

「何日だよ」

「さあ？ みなみ、何日？」

「二万三千三百五十日です」

二人揃って仲良く首を捻る慎太郎と悠梨。その顔が“？”という心境を物語っている。補足説明が必要だと気付いたみなみは、言葉を付け足した。

「七百七十八か月、約六十四年です」

「ほれ」

何が“ほれ”なのかわからなかったが、慎太郎は曖昧に頷いた。確かにこの数値は庶民には厳しすぎる。

「それに、今は父さん、忙しいからさ」

悠梨がぼやくように言った。内容の意味がよくわからない慎太郎に、みなみが語りかける。

「来期に行われる統一地方自治体選挙のことだと思います」

その解説で慎太郎は悠梨の言わんとしていることが理解できた。

新聞もニュースも見ない慎太郎だが、幼馴染みの父親が選挙に出馬するなら嫌でも耳に入る。今度の自治選挙に悠梨の親父が立候補したんだった。この前哨戦の大事な時期に軍資金を二億あまりもほっぽり出すタワケはいないし、万が一にも遠回しとはいえ金融会社と接触したことが明るみになったら、どう転んでも選挙では不利になることだろう。

「悪かったな」

慎太郎はバツが悪そうな顔付きで言った。悠梨は微笑七割苦笑三割で笑う。

「なぜそこで謝る？」

「親父さん、もうすぐ選挙なんだろ。よく考えもせず勝手に都合のいいこと言ってるすまん」

「んー、そんなんは別にいいんだけどさ。父さん、三年くらい前から今年の選挙のために、あっちゃこっちゃ視察に行ったり参謀になる人集めたり、ここ最近は寝る間も惜しんで話し合ったりして、なんかやたらと頑張ってるんだよなあ。だから、あたしや選挙なんてよくわからないけど、あんま余計な気苦労はさせたくないんだよ」

悠梨は両手を後ろについて天井を眺めた。

悠梨の父親のことはこいつ同様昔から知っている。悪徳政治家の正反対な人柄を想像すればいい。温厚で人当たりが良く、資産家であることなど少しも鼻に掛けない方だ。

さらにマズいのは悠梨の実父だけあってかなりのお人好しなのだ。選挙そつちのけで萩本家の救済に走るかもしれない。いや、たぶんそうなる。

コンコン。

不意にドアをノックする音が聞こえ、三人が音源を見やる。

「お嬢様、お飲み物をお持ちいたしました」

扉の向こう側から告げられ、

「おう、入っていいぞー」

と悠梨が言うと、失礼します、という挨拶のあとに給仕車を押しながら茜が入室してきた。台の上にはティーポットが二つに急須が一つ、そしてティーカップが二つに湯飲みが一つ。

慎太郎はその中身をすべて当てることができる。ミルクティーとダージリンと玉露茶。茜は一度でも好みを聞いたら永久的にそれを忘れない、何人だろうとである。だから初見でない限り、客の好みに合わせて飲み物を用意することができるのだ。

「はい、どうぞ、みなみさん」

まずダージリンが注がれたカップをソーサーに乗せて、もっとも近くにいたみなみに渡した。

「ありがとうございます」

礼を述べてから丁寧に頭を下げるみなみ。そしていま、慎太郎と茜の距離は五メートルはある。茜は嫌な顔どころか微笑を称えながら慎太郎の元にカップを持ってきてくれるのだろうが、わざわざ手数をかけさせるほど慎太郎は肝は座つてない。立ち上がって自分から貰いにいった。

「あら、慎太郎さんが受け取りにこれなくても、わたくしがお持ちしましたのに。気を遣わせてしまい申し訳ありません」

茜が軽くお辞儀をする。なぜそれくらいで謝罪されねばならのか、慎太郎はまったくわからない。相変わらずメイドとは難しい職業だと思う。

「あいや、そんな謝らなくても。俺がただ早く飲みたかっただけで

すし。吉川さんの淹れるもんはすごい美味いつすから」

それは本当だ。彼女の淹れた飲み物は例外なく至高の味がする。初めて飲んだときは口にしているのかすら迷った。サ店に出したら一杯一万円はするに違いない。

「そうですか？ ふふ、そう言われると、とても嬉しいです」

茜は慈愛に満ちた顔でニッコリと微笑みながらミルクティーの力ツプを渡した。やっぱりお嬢様ならどう考えてもこの人のほうが適任だろう。

脳内でそのことを再認識しながら一口啜ると、まさに筆舌に尽くし難い味が口内に広がった。余韻に浸りながら視線を上げると、みなみがぎゅっと唇をつぐんで顔をしかめていた。慎太郎が気付くと同時に茜も気付いたようだった。

「いかなされました、みなみさん。お口に合わなかったのでしょうか……」

表情を曇らせて茜が訊いた。メイド職に誇りをかけている彼女としては、出したものをマズいと言われるのはリストラ宣告にも等しいのだろう。

茜が言ってからみなみはすぐに首を横に振った。口を手の平で押さえながら、

「……あひゅい」

小さく舌つたらずに原因を伝えた。みなみが重度の猫舌だというのは慎太郎も悠梨も周知のことだ。そしてもちろん茜も。だからこそそのシヨックは大きい。

「も、申し訳ございません！」

茜は手を重ねて思い切りよく頭を下げた。

「みなみさんの適温になるよう温度を調節したつもりが、こんなことに……ああ、どうしましょう……火傷になってしまったら……。本当にごめんなさい！」

ほとんど泣きそうな顔の茜があたふたしながらまた腰を折り、回復したみなみがすかさず茜の非を否定した。

「いえ、大丈夫です。ちょっとジリッとしただけですから」

「ですが、これはわたくしの失態が要因であって……」

「よく冷まさずに飲んだわたしが悪いんです。茜さんは悪くないです」

「……そうでしょうか」

「そうです。悪くないです」

「……すみません、ありがとうございます」

ようやく茜が納得して場が落ち着いたところに、悠梨の気の抜けた声が舞い込んだ。

「おうい、盛り上がってる時になんだけど、あたしのお茶は？」

自らを指差しながら要求すると、茜の目に眼光が戻った。

「もちろんお嬢様の好きな玉露も用意してございますわ」

「おお、早くくれ」

「駄目です。お飲みになりたいのならば、ベッドからお降りくださいませ」

「なんだよー、ケチケチすんなよー、くれよー、ぎぶみいぷりいず」

「いけませんっ。お嬢様ともあるうお方が、ベッドの上であぐらを掻きながらお茶を飲むなどは、言語道断ですっ」

「別に言語が道断してたってあたしは知ったこっちゃ、」

「お嬢様！」

一喝。悠梨は洪々といった感じだが、のたのたとベッドを下りたさて、立っている自分とはもなく、悠梨と同じくベッドに座りながら飲んでいたみなみにはなんも言わないんだな、と慎太郎は思う。まあ俺達と悠梨とじゃ接し方が違うのはしょうがないか。

茜は殊勝な心掛けの悠梨に満面の笑みで満足し、悠梨が立ち上がる頃にはテーブルにあった椅子を持ってきていた。いつの間にか慎太郎の分まである。

「うらあ、移動したぞー。茜、お茶ー」

などと悠梨が言う前にはもう、茜は湯飲みを持って待機していた。「はい、どうぞ、お嬢様」

腰を曲げて高さを合わせ、穏やかな面持ちと口調で悠梨に手渡す。やっぱり違うな。俺やみなみのときは楽しそうなんだが、悠梨んときは嬉しそうなんだよな。

慎太郎は椅子に座ってミルクティーを飲み干し、まだ飲みたいなと思ってポットをチラ見た一瞬を茜は見逃さない。

「おかわりをご所望でしょうか？」

「ああ、はい」

慎太郎が頷くと、カラになったカップを引き取り、もったいないことに新しいカップと交換されて二杯目がきた。

他の女子二名を一瞥すると、みなみはフーフー息を吹き掛けながらチマチマとダージリンティーを口に運び、悠梨はと言えばお早いことだがとうに三杯目である。

そして味わう気もなさげに一気飲みをしていた悠梨と目が合うと、彼女は思い出したような顔となって慎太郎に質問を投げた。

「そっういや今気付いたんだけど」

「あー？」

「慶輔は？」

慶輔……？

「あつ」と一緒に慎太郎・みなみ。

「忘れてた……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3259d/>

Rase of Arietta

2010年10月16日02時19分発行